

鎌倉楽しその出張講話

「わらびわらびあじかレシジ」

「じーー・参る 義経と弁慶の世界へ」

義経の誕生

平治元年（1159）牛若丸生まれる。源義朝と九条院の雑仕・常盤御前との間に義朝の九男、今若、乙若、丙若の三男として誕生。

この年の十一月、父・義朝と平清盛との間に勢力争いが始まる。結果、義朝は清盛に敗れ部下に謀殺される。清盛は、捕虜となつた十二才の源頼朝と常盤御前の男子三人を殺すこととした。頼朝は池禪尼の嘆願によつて伊豆に配流されたことになつた。

一方、常盤御前は三人の子を連れ平清盛に身を以つて助命の嘆願。京の都で絶世の美女だったので、清盛に囲われ、今若是園城寺へ、乙若是醍醐寺に預け、乳飲み子の牛若は母・常盤御前と清盛のもとで六年間囲われの身となる。牛若是清盛を実の父親と思つて慕ひす。この囲われの母・常盤と清盛の間に女子が生まれ、これが清盛の正室・時子

に知られる。

そして、常盤は大感卿・藤原長成に嫁ぐ。七歳の牛若是鞍馬山の寺に預けられ「遮那王」と仰乗る。

鞍馬山の遮那王

預けられた遮那王は、いじめ父は清盛の「ライバル義朝である」とを知り、慄然とする。そして、天狗を相手に剣術の修行に励む。読経よりも中國兵法を読み武芸を磨く。遮那王十一歳の時、都に備兵の刀狩を聞く。

武藏坊弁慶の誕生

熊野別当「湛増」の子として生まれる。母の胎内に十八か月いて、生まれた時は二、三歳児の体つきで、髪は肩まで伸び、歯も生えていたといわれる。

幼名は「鬼若」と命名され京で育つ。比叡山で修行するが、乱暴で追い出される。やがて剃髪して「武藏坊弁慶」と仰乗る。

義仲を討ち郷御前を正室に迎える

先陣を切つた「木曾義仲」は平氏を京の都から追い出したが、田舎者育ちで、都を荒し

九九本まで集める。あと一本とこいつの九で、五条大橋で牛若と出会い、牛若の見事な太刀を奪おうと襲いかかるが、牛若に負け、以来終生、牛若の家来となる。

遮那王から「源九郎義経」へ

金売り吉次信高の案内で、奥州藤原秀衡の元へ鞍馬を抜け出す。承安四年（1174）一六才の時のことである。途中「鏡の宿」で元服して「源九郎義経」となる。

不興をかつた。後白河法皇は、田に余の義仲軍の追討を頼朝に要請。

義経は、頼朝の弟・範頼と義仲討伐のため鎌倉を出発。時に義経二五才。義仲敗れ近江の国・粟津で討たれ三十一才の生涯を閉じる。

義経は京の堀川邸で、兄・頼朝の命により、御家人の河越重頼の娘・郷御前を正妻に迎え、御家人の河越重頼の娘・郷御前を正妻に迎え

義経、静御前を見初める

平氏討伐の命が下され元暦元年（1184）一月の勝利。その勝利の宴の席で静御前の舞を見初め愛妾とする。

文治元年（1185）には陸島へとして壇ノ浦で平家を滅ぼせる。壇ノ浦の戦いでは、八才の安徳天皇は、清盛の妻・一位尼と共に入水。宝剣も沈む。建礼門院は助けられ、平家の総大将・宗盛と嫡男・清宗は捕虜となる。

義経の凱旋と頼朝の不興

平家を滅ぼした義経は京の都に凱旋。後白河法皇より官位を受ける。また、昇殿も許

される。

やがて、平時忠の娘・蕨姫を側室として迎え、（これ等が頼朝の激怒する）ことなる。（義経二十七才）

義経の鎌倉入りの拒否

義経は、宗盛父子を捕虜とし、意気揚々と鎌倉に向かう。しかし、頼朝は勝手に官位をもらった者は、鎌倉に入つてはならないと命令を出す。

そのため義経は鎌倉に入れず、腰越の萬福寺に留まる。宗盛父子は頼朝の命で、政子の父・北条時政に弓を渡される。

義経の「腰越状」

義経は萬福寺に逗留し無実を訴えた書状を弁慶に下書きさせ、自ら政所別当・大江広元に宛てて嘆願する。しかし、許してもらはず

宗盛父子を引き連れ京都に引き返すことにな

る。この義経が嘆願した書状は、世にいじれを「腰越状」といつ。

平家の終焉

京都に引き返す途中、義経の元服した鏡の宿場を通り過ぎた篠原の地で、捕虜の平宗盛父子の首を刎ねる。（これが平家の終焉の地となる。（現・滋賀県野州町）

頼朝 刺客を放つ！

京の堀川邸の義経が刺客に襲われる。静御前の機転により、難を免れて、逆に刺客首謀者を捕らえ、首を刎ね六条河原に晒す。

刺客を放つた張本人は、兄・頼朝であった。刺客の手先となつたのは、頼朝の御家人・土佐坊昌俊であった。（この土佐坊昌俊は、現在の東京渋谷・金王神社の御先祖です）

そこで、義経は、後白河法皇より頼朝追討の宣旨をいただき豪族の応援を求めるが、その数は少なく、逆に頼朝の御家人が大挙京に迫ると、今度は、後白河法皇は頼朝に義経追討の宣旨を出す。（義経二十八才）

義経 京を脱出

義経は頼朝に追われる身となり、京に留まることに身の危険を感じた義経は、静御前と別れ、弁慶など手勢を連れ九州に逃げる

ため大物浦から舟を出でる。しかし、天にわからに搔き壊つ壇へ浦に沈んだ平家の怨靈のためか暴風雨となる。弁慶の必死の祈祷により、住吉浦に漂着する。

義経、弁慶主従山伏の姿となる

その後、義経一行は山伏の姿に身をやつし京の周りを逃げ回り、静御前に再会する。

義経、静御前と別れる

追手を逃れ、義経は静御前や弁慶を伴い、雪降る吉野へ向かう。しかし、吉野山は女人禁制のため、再会を約し静御前は山を下つて行った。山を下る途中、頼朝の家中に捕らえられ鎌倉へ連れてい行かれる。この時、静御前は義経の子を宿していた。(静御前十八才)

静御前の行く末

吉野での別離から半年後、頼朝の命により鶴岡八幡宮で舞う静御前。武骨な鎌倉武士は静の舞に酔いつぶれる。義経を慕う静の舞に頼朝は怒るが、政子に諒められる。

義経、藤原秀衡のもとへ

山伏姿に扮した義経主従は、藤原秀衡を頼り奥州平泉に向かう。途中、安宅関で関守・富樺泰家に見とがめられ、弁慶は東大寺勧進の白紙の勧進帳を読み上げ、

義経を庇つ。

関守・富樺は弁慶に忠義の心を感じ、関を通す。秀衡のもとで、高鎧の地に屋敷を構える。

しかし、義経の首を受けると片瀬の浜に捨てられた。(義経三十一才)。

しかし、金色の龜が泥まみれの首を背負つて上がってきた。そして見慣れない童子が現れ「我れは義経なり願わくば、我が首を葬つてほしき」と言い終わると金色の龜とともに忽然と消えた。

村人が驚き、その首を丁寧に洗い清め藤沢の里に葬つたといつ。

現在は藤沢・白旗神社の御祭神として祀られ

てゐる。

秀衡の後を継いだ四代・藤原泰衡は、頼朝に

味方して、高鎧の義経邸を急襲した。

急襲を受けた義経は奮戦虚しく館に火を放ち、妻子と共に持仏堂で自害した。

もしも、義経との間に生まれた子は男の子。頼朝はおびやかせ由比ヶ浜に捨てた命ある。

傷心の静御前は京に帰つて行つたが、一代前半で亡くなつたといわれています。

義経、神として祀られる

義経の首と弁慶の首は、鎌倉に届けられ、

腰越萬福寺において侍所別当・和田義盛と権原景時によつて首実検されたが、頼朝は経を守つたと言われてゐる。

弁慶はこの戦いで喉笛を打ち裂かれて全身赤く染めながら戦い、何本もの矢が体に刺さつたまま館の前に立ちぬだかつて死に、義経を守つたといわれています。

(文責 清藤 孝)

以上